Now

TOKUYA TIMES

とくや タイムズ

豊流会

http://ito-tokuya.com/tokuya

豊橋東ロータリークラブ

Autumn, 2013, **vol.26**

「復興支援　in　気仙沼」

事業で見つけた**ふるさと再生**について

26号発行についてのご挨拶

本年度のTOKUYA　TIMESは、皆さんとともに考えてみたいテーマに基づいた内容としています。

今回のテーマは「ふるさと再生」です。

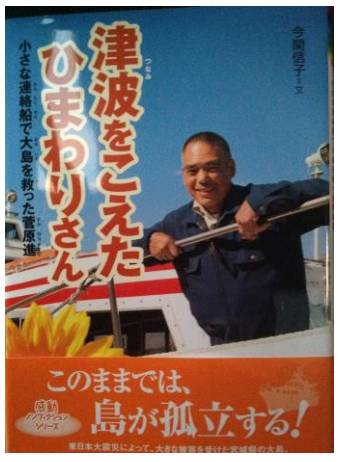
この夏、私は豊橋東ロータリークラブ主催の高校生による東北支援ボランティア事業「復興支援 in　気仙沼」事業へ同クラブの会員として参加しました。

私は何度か東北支援へ赴いてはいますが、今回の

「笑顔を届けよう」

僕たちの支援を必要としてくれる人たちがいる
現地の人達の笑顔が見たい

とした東三河の高校生の思いがいっぱい詰まったこの事業は、私に我が国のこれから立ち向かう最大の課題である「ふるさと再生」とは何かを教えてくれました。



—はじまり—

豊橋東ロータリークラブが新たなクラブの主要奉仕に掲げる東北復興支援プロジェクトは東三河11校の高校生・教職員が参加する事業「復興支援 in　気仙沼　2013」として、夏の陽が傾き始めた8月16日の夕刻、桜丘高校で出発式を迎えていた。

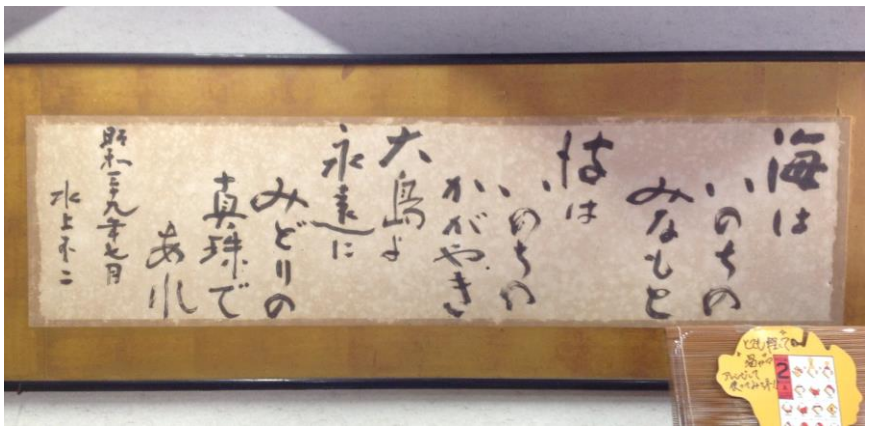
高校生にRC会員や教職員などを合わせた総勢120名が大型バス3台を連ね車中2泊大島1泊の三泊四日で気仙沼市・大島にてボランティア活動をするプロジェクトの始まりは強行軍に相応しい力強いセレモニーとして幕を開けたが、私自身に置き換えれば事業の目的や行程は理解しているものの私に与えられたミッションについてはおぼろげであった。

—翌朝—

夜を徹して北へ向かうこと13時間、バスの車窓から見える明け方の景色だが、東北とは言え夏の暑い日差しに焙られ始めた早朝の気仙沼湾はあまりに穏やかで、朝靄に包まれまどろんでいた。

しかし気仙沼に近づくに従って津波の傷跡がそこかしこに伺える。多くの生徒が命を失った大川小学校、最後まで津波からの避難を呼びかけた遠藤未希さんのいた鉄骨のみ残る南三陸町防災対策庁舎、そして基礎のみが残る住宅地などが車窓を過ぎる。

気仙沼市のボランティアセンターでの待ち合わせを前に、基礎のみ残る住宅地に黄色い花を咲かせる太宰治が月見草と間違えた大待宵草を眺めれば海辺には瓦礫の解体場といった景色が悲しい。



『ボランティアセンターである気仙沼復興協会は震災により加速してやまない東北の若者の踏ん張り処だ。』朝は秋刀魚漁で沸く気仙沼港での見送り式、午後は被災住宅跡に生える身の丈ほども伸びるにまかせた草取りだが、失神しそうなほど暑い。草取りの後は大島に渡り、宮城県初披露の三河伝統の手筒花火と豊橋銘菓を持ち込んでの島民との大交流会を催す。

そして翌朝は被災地住宅での高校生訪問のサポートである。ここで島を孤立から救った臨時船の『ひまわり』の船長菅原進さんと出会う。詳細は帰りの車中で夜明かして読んだ本から理解したが、震災後に世界中から称えられた勇気とは、まるで壁のように立ちはだかる津波を超える操船技術もさることながら、被災後すぐに海上タクシー『ひまわり』を再開、しかも運賃は被災者無料、一般はフェリーより安い片道300円でこの分は義援金として寄付した精神であり、亡くなられた方々の救助である。

しかしそれ以上に感銘を受けたエピソードがある。実は菅原さんは大工さながらの腕前を持ち自らの手で海辺に自宅を建てるが大津波によって倒壊してしまう。今は海辺に住居を持っていたため被災した同じ境遇の島民とともに被災者住宅にいるが、全員揃っての高台避難をまとめあげたという。

私は東日本大震災発生後の2011年6月宮古市への支援をはじめ幾度かの東北支援に参加する機会を得たが、その度に沸いた疑問はこの国の未来を再創造する大きな絵「ビッグピクチャー」が未だ見えてこないことだ。

そういった意味で、今年正月の中日新聞社説「年のはじめに考える　人間中心主義を貫く」は今でも記憶に新しい。経済は人間のためのもの。若者や働く者に希望を与えなければならない。近代思想や経済至上主義ではもう立ち行かない、自然と共生する文明のありかたを模索し近代文明を考え直す。そこに人間中心主義が連なるというもので、近代思想の研究家で評論家の松本健一さんに触れ著作「海岸線は語る」から復興構想「ふるさと再生」を紹介している。

松本さんによれば、日本民族は民俗学の折口信夫のいう「海やまのあひだ」に住まいしてきた民族であり、海と山の豊かな自然が精神的細やかさや繊細な美的感覚を養い自然と共生する暮らしを選び続けてきた。しかし西欧近代思想を取り入れ発展するうちに自然と共に生きる日本人本来の思想を失ってしまった。一方で西欧の近代は自然を制御、征服する思想であり、今回の大震災はその西欧の限界を示した。巨大なコンクリートの人工堤防を簡単に破壊した。人間は自然を制御できない。

松本さんが復興を試みる「ふるさと」とは、人が生まれ、住み、死んでゆく人間存在の根の場所としてのふるさとであるが、そのためには自然と共生する文明のあり方を模索するとともに近代文明を考え直し、そこに人間中心主義が連なるというものである。

その答えを大島で宿泊した明海荘の玄関で出会った詩人であり童謡作家である水上不二さんの詩に見つけた。故郷気仙沼の大島をこよなく愛し、**「海はいのちのみなもと　波はいのちのかがやき　大島よ永遠に緑の真珠であれ」**と謳った詩が代表作であるという。永遠は「とこしえ」とよむそうだ。

明海荘の女将さんに「水上不二さんのお宅を知っていますか？」と尋ねると驚いたことに「お隣ですよ」と言う。

今回の大津波は大島海岸の砂浜をさらい、菅原さん達の家を襲いながら高台の明海荘の真下まで迫ったそうだ。しかし一旦は流し去られた砂浜だが、今は再び蘇えりを見せている。大島の復興はまだまだ時間がかかるが、巨大なコンクリートの人工堤防とは無縁であろう。

私が「復興支援 in 気仙沼2013」事業をとおして見つけた答・・・
それは・・・自然と共生する人たちからおしえられた・・・
「ふるさと再生」とは「永遠を願い働く人の営み」である。

ありがとう

あとがき　今回は詩人の水上（みずかみ）　不二（ふじ）(1904 年-1965 年)さんを紹介します。水上さんは宮城県気仙沼市大島の出身。友人であり詩人の「まどみちお」氏（代表作は「ぞうさん」「いちねんせいになったら」など）と同人誌「昆虫列車」を主宰。故郷の気仙沼市の小中学校、長く移住していた東京都小金井市の小学校の校歌の作詞を数多く担当しています。2004 年には、気仙沼で水上不二生誕百年を機に故郷で不二ブームが起きたそうで、翌年に詩集「水上不二・詩ワールド」が発刊されるなど昨今相次いで書籍が刊行されているそうです。

市政報告会の御案内

●月●日（●）午後 7 時より

松葉町カリオンビルにて開催

是非お越しください！

出張報告会大歓迎です。
ご連絡下さい。

発行

伊藤とくや事務所

豊橋市松葉町 3-68
FAX : 0532-56-5521
TEL : 0532-53-4556
bbito@mx1.tees.ne.jp
携帯：090-3855-9696

本年度は議会選出の監査委員なので、一般質問ではなく今の政治課題をテーマと致しました。ご感想をぜひお寄せください！